

第9回新鋭評論賞

正賞

渡部有紀子

日野草城の「戦火想望」

日野草城の「戦火想望」

一、はじめに

俳壇史における日野草城は、かつて山本健吉がへ極端な早熟型の極端な晩成型（「現代俳句」昭和二十六年）と評したように、その評価は初期の二十代と晩年の四十代後半から五十代の作品に集中し、戦時期を含む三十代から四十代前半の頃の作品にはあまりスポットが当たっていない。俳誌「旗艦」を興し、新興俳句のリーダー的存在だった草城は、戦時下の当局からの弾圧を恐れ、「旗艦」の後継誌「琥珀」の選者を昭和十六年八月号をもって辞し、戦後まで作家活動は休止する。そのため、評価の空白期間が生じてしまうのも仕方ないのだろう。ただ、今日の俳壇史において草城の名前が必ず出てくる「ミヤコ・ホテル論争」「戦火想望俳句」は、実はこの空白期間に発表された作品が契機になっている。日中戦争時の昭和十三年、「俳句研究」

九月号に発表した連作作品「戦火想望」は、これ以降、銃後にあつて遠く前線の状況を想い描いた戦争俳句の総称となる。このような作品を発表するまでには、「ミヤコ・ホテル」のような、フィクションを詠むことの経験があつたからではないだろうか。彼の俳句で志向したことがどのように戦火想望俳句へと結びついたのか考えてみたい。

二、「戦火想望」発表前後の俳壇

昭和十二年七月七日の盧溝橋事件をきっかけに、日本は日中全面戦争へと突入する。昭和十三年になると戦争俳句が俳壇に氾濫する。特に当時の俳壇において、伝統的なホトトギス派の俳人たちが、季感のない戦争を詠むことには消極的であつたのに対し、無季論を展開していた新興俳句派の作家たちは積極的に戦争を題材とした句を発表していく。西東三鬼が

へ青年が無季派が戦争俳句を作らずして、一体誰が作るのだ？この強烈な現実こそは無

季俳句本来の面目を輝かせるのに絶好の機会だ。（「京大俳句」昭和十二年十二月号）
と、自らも実作に励む。三鬼と共に「天香」を創刊した石橋辰之助は

へ非常時の深まりゆく姿に対して、新興俳句雑誌が何等の反応をあらはさないといふわけはない。（略）僕達は常に新展開を期さうとしてゐる。この機会に戦争を素材として積極的に乗り出すことは僕達に課せられたといふよりも幸運にも与えられた重大な切り札といはなくてなんであらうか（「俳句新聞」昭和十三年七月十五日）

と、新興俳句運動の新たな局面の好機として戦争をみなしている。山口哲子は、戦争とは、政治的・社会経済的な問題だけでなく、究極的にはへ忠君愛国の精神、言ひ換へれば個人が国家に帰一せんとする日本精神といったへ無形なるもの、有形なるものの総合体と定義した上で、総合体である戦争の中で俳句が詠めるのはへ個人の精神に関する（略）国民的感情の問題である

（「俳句研究」昭和十二年十二月号）とすると、
そして、有季の伝統俳句では、俳句に詠まれる
素材と季題との配合による効果が最も重視され
るため、国民的感情は季題趣味の陰に隠れてし
まう（季題趣味の為に国民的感情はうちひしが
れてしまふ）と伝統俳句の限界を指摘する。そ
れに対して無季の新興俳句は、季感や季題趣の
制限から脱却し、十七音の詩感のみを求めるの
だから、詩感と国民的感情のバランスを取りさ
えすれば新興無季俳句が一番有利な地歩を占
めてゐる（前掲、昭和十二年十二月号）と、新
興俳句作家たちを鼓舞する。

哲子は同時に、実際に出征した文学者たちの
現地報告はそのままでは文学とはなっておらず、
実体験をへ文学の実感にまで再組織すること
を必要とする」と断言する。そしてさらに一歩進
んで、へ実感であろうが虚感であろうが、それが
再組織された瞬間に文学の実感に化けて来る
（「俳句研究」昭和十二年十二月号）と、虚構
性という文学の本質に触れながら、ニュース映

画や報道写真・記事、想像によつて戦争俳句を作るといふ手法を認めている。実際、この頃になると、出征俳人の「前線俳句」、銃後の生活を詠んだ「銃後俳句」と並んで、内地にあつて前線の有様を想像力を駆使して詠んだ句が「京大俳句」「天の川」「句と評論」「風」「旗艦」等の新興俳句系の俳誌に次々と発表される。いくつか挙げる。

機関銃熱キ蛇腹ヲ震ハスル	西東三鬼
沼くろし機銃火を吐きつゝ渴す	津路章人
観客の頭上に這ひ出しまはる戦車	清田朗雨
そらを撃ち野砲砲身あとずさる	三橋敏雄

ただし、前線の様子を想像で詠んだ句に対しでは抵抗感もあつたようだ。新興俳句派や伝統俳句派どちらからも一定の距離を置いていた白田亞浪の「石榴」門下であつた大野林火は、当時のこのようなへ身自ら、戦争に行つてゐるがごとき一種の錯覚的想像力を發揮してゐる作

品」に対し

「私はかゝる作品を見る度に不純なものを感ずる。挙げれば

（イ）作者は戦争を借りて暗に自己のヒロイズム（それも安価な低級なもの）を享樂してゐるのではないであらうか。

（ロ）題材の目新しい、刺激の強さを追ひ廻してゐる所がないであらうか。（「俳句新聞」昭和十三年八月十五日）

と、批判する。大野林火の弁の中には、へはつきりしたことは前線に活躍されてをられる人々から送られる俳句には何としても認めねばならぬ。我々を打つ偽らざる真実があり、力がある。そして或るものは壮絶に、或るものは重苦しく、或るものは哀傷感さへ誘ふともあるのは、先に山口誓子が述べたへ個人の精神に関する（略）

国民的感情」にも通じるであらう。

なお、「国民的感情（または国民感情）」は、当時の戦争を扱った俳句の在り方について一つの論点となっていたようだ。先に見てきたよう

に戦争俳句の論理を積極的に展開していた哲子は、「天の川」の吉岡禅寺洞のへ国民感情は起つても、まだこれに詩感情が加はらねば、などと云つてゐる冷ややかさでは、とてもいゝ戦争俳句は出来ない」と、いう発言にあるような国民感情のみが優先される風潮を取り上げて、

へ国民感情さへあればあとは何もいらぬいふのも変だし（略）（戦争俳句は）いづれも国民的感情に基底を置いてゐるが、作品ではそれが直接出るか、間接に出るか、或いはずつと間接的になつて、あるが如くなきが如く見えるかのちがひだ。「事変の反映しないところ」に現代のわが日本民族詩——俳句はない——などといふまるで俳句が国民的感情を詠ふものであるかの如き言辞は些か薬が利き過ぎてゐる。

（「俳句新聞」昭和十三年七月十五日）

と述べ、へ俳句が詩である以上（略）何時如何なる場合にも詩感情を喪つてはならぬ」と警告する。

以上のように、戦争を詠んだ俳句についての

俳壇での受け止められ方は、出征俳人の前線での体験が最大限に尊重されつつも、それが直ちに俳句という詩に昇華するには未だ困難があるという認識もある一方で、前線の様子を想像で詠む句に対しては戸惑いと、前線からの戦況報告や銃後の生活に伴って引き起こされた「国民的感情」に圧倒されることなく詩精神を保持しようとする警告とが並立している状態であつた。

三、戦火想望俳句

昭和十三年の夏には火野葦平が徐州（現在の中華人民共和国江蘇省の北西端）に従軍した際の体験記を基にした小説『麦と兵隊』を発表し、国民的ベストセラーとなる。そこに目を付けた総合誌「俳句研究」は、同年九月号に『麦と兵隊』を読んだの戦争俳句を三人の新興俳句派の俳人に依頼する。日野草城、東京三（後の秋元不死男）、渡辺白泉である。草城はこの依頼に五十六句の作品をもって応えた。発表された当時の誌面では、原作の章立てに呼応するかのよう

に二句から四句程度の連作が、それぞれ一行空きのスペースをとって掲載されていた。それは以下のようであつた。

戦火想望

―「麦と兵隊」(火野葦平)に拠る―

日野 草城

大江流黄なり艦首に白く湧き
炎天に現れて聳ゆるは紫金山

熱風の麦なびく麦の青はげしき
太陽光垂直に射おろして灼く
千里茫々として麦青きのみ
人血のあふれては乾く千里の麦

きのふ火を噴きしト―チカ青麦に
青麦を起ち白鷺となりて翔る

戦火去り壁の群落麦の海に
日章旗あり兵が居り麦の海に
爆撃機爆弾を孕めり重く飛ぶ

青麦原逆光に戦車隊来る

破声はるかなり麦は夕映ゆる

麦暮れぬ流弾笛をふいて飛ぶ

大陸の蛙鳴き日本兵の鼾

蛙鳴き無電送信機の響

青麦に排泄の兵群れ沈めり

青麦にいづれも赤き糞ンを置く

黄塵裡影絵の部隊征きに征く

大陸の黄塵を齒に嚙みて征く

麦の海に溺れむとして征き渴く

水筒の水のひとつちをゆるく嚙みおろす

ひとつちの水胃の壁にゆきわたらず

桑の実の熟れ垂りぬふるさとのごと

アカシアのあはれに白き花咲ける

蜜蜂の巣に青空の垂れて静か

麦なびきチェッコ機関銃焦燥す

麦の穂に月のぼり月かゞやかず
麦の月磯節を唄ひゐしが寝ぬ
麦の月歩哨居り歩哨は眠らざる
白昼なり兵昏々として睡る
戦塵に汚れつくせる顔睡たり
つはものら死闘のいとまひたに睡る
いのちありてあはれ死人のごとも睡る
睡てもねてもいね足らじいのちありにけり
部隊征く黄塵麦の海ゆ騰ち
薄暮なり流弾瓢と瓢と過ぐ
弾道も暮れけらし飄々と韻く
満月皎々たり流弾も見ゆるかと
流弾の搏つや月夜の屋根を壁を
飯爨の火の消えてまた青き夜
兵寝たり月のはげしき高粱殻に

寝し兵も高粱穀も輝り月更けぬ

敵前の月に熟睡支那の螢

進軍や殊に月照る城の外

麦畑を軽戦車来る頭を振り立て

自動車みな塞となんぬ弾雨下に

裹まざる骨にさはりぬ戦友を抱き

肱を撃たれ皮肉も骨もあらざりき

一弾のつらぬくまでのいのちなる

人間生きて鉄火戦車の中に居る

中の兵生きてゐる戦車動いてゐる

戦車より兵出て煙草くはへけり

傷馬棄てられて黄昏の草を食めり

ころぶして寝るまでに軍馬憊れたる

死なざりし横腹を蚤にくはれける

当時の「俳句研究」編集部より一体どのような原稿依頼が草城に出されたのか分からないが、原作にある戦地の記録を忠実になぞって句の景を展開することに終始している印象が拭えない。実際、当時も批判が起こる。特に加藤楸邨は、昭和十三年十月号「新潮」の「俳壇展望」において

「句を詠む動機となる」へその感動が果たしてこの俳句作家精神によつてうたれたものか、それとも原作のつよさにうたれたものであるかということの疑問であつた。若し原作にすでにあつたものなら、われわれはこの作家達の之を傳へてくれた再現技術のみを取り上げてゐる」

に、過ぎないと断じ、俳句としてわざわざ表現する意味があるのかと問いかけている。草城はこれに対し、

へ素材と表現とが不可分離に融化して成立してゐる文芸にあつて（略）その与ふる感動を評定する場合、素材のよさであるか表現のよ

さであるか、体験に基づく感動であるか技術による感動であるか、それは論究する必要もないことである。それと同様に、原作（表と兵隊）に既に存する感動であるか（つまり媒体を通じての間接体験そのものに於ける感動であるか）之に拠つて成立した俳句の表現に於て始めて見出される感動であるか（つまり技術による感動であるか）そんなことは問ふところではない。（「旗艦」昭和十三年十月号）

と、反論する。そして、原作者には作品を書く動機として実体験に基づいた感動があるのに対し、俳句作家はその感動のへ保全者として、原作に描かれた体験に触発されて句作品に仕立てたへ俳句表現の功績、技術上の功績をを持つ者である」と断言する。その上で、原作者の一次的な体験によつて得られた感動は、それを読んで二次的な体験を得るへあらゆる共同体験者によつて遍く受容される。だから、一次的な体験であろうと二次的な体験であろうと関わりなく、作家は得られた感動をいかに把握し、どのような

表現をするのかという点に注力して作品に仕立てるのであるから、そこで駆使される技術、表現の工夫こそが評価されるべきであると主張する。俳句作家は原作の見取図を志してゐるのではない。原作を媒体とする間接体験によつて「創作」を志してゐるのである（前掲、昭和十三年十月号）。

草城の指す俳句の「技術」とは、俳句の持つ定型感が大きな位置を占めていたと思われる。「戦火想望」に先立つ昭和十四年、「俳句研究」十一月号で草城は、「超季眞諦」と題して有季俳句と同格に無季俳句も容認する立場についての考えを述べているが、その中で何らかの作品が俳句であることを満たす要件は、従来のような定型と季が同等に二つあるのではなく、定型こそが最重要であり、季は条件で過ぎないという。そして俳句を觀念するに當つて定型のみを本質的の要件と考へ季感の有無を超越すると言ひ切っている。

「戦火想望」に対する加藤楸邨からの、俳句

ではない文芸――短歌や詩、散文――でも表現できる内容であれば俳句をわざわざ作る必要はなく、へ自分の現実の生活によって、たしかに自分のものである感動を詠むことゝが重要で、映画や小説からの想像で俳句を作るとは、俳句作家の精神に反するという批判に対しては次のように反論する。

へ如何に感動を共通にしやうども、その感動の把握が二次的であらうとも、之が定型に対する尊敬といふ精神も下に創作、られれば、それは最早単なる再現ではなく、翻訳ではなく、一つの新しい創作であるのです。（略）われわれがこの極めて極小な、殆ど断片的とまで見られる詩に何故かくまで惹きつけられ、之を棄てて去ることが出来ないか、その秘密は他でもない定型の魅力です。定型の威力です（「旗艦」昭和十四年二月号）

と、俳句の定型感の重要性を強調している。確かに、「俳句研究」に発表された「戦火想望」五十六句のうち有季の俳句は三十一句。季感のな

い言葉のみで作られた無季俳句は二十五句。対して定型について見れば、上六・中八の句はあつても下五はすべて守られ、定型感を保持している。樽見博はこのような草城の定型へのこだわりについて、へ草城が目指したのは、その作品の表面に現れた内容ではなく、あらゆる事象、ことに現代的な事柄を十七音に表す技術だったのではないか（略）その場合、表現されたことが詩たりえるかどうかは、内容ではなく、五七五の音数律に表されたときの美にある（『戦争俳句と俳人たち』平成二十六年）と指摘する。

草城がここまで俳句の定型感にこだわった理由は、初期の頃に志向したフィクション性のある俳句に遠因があると考えられる。若き日の草城の作品を見てみよう。

四、「のどぼとけ」とミヤコホテル論争の頃

春の灯や女は持たぬのどぼとけ

第一句集『花氷』に収められたこの句の初出は大正十一年七月号の「ホトトギス」雑詠欄。女性の頸の美しさ、なまめかしさがへ春の灯ゝによつて浮かびあがる句であるが、ややもすると、できすぎた理想的な女性美が詠われ、さながら映画のワンシーンのようなフィクション性を感じる句である。もともと草城は、俳句初学の頃に蕪村のへお手討の夫婦なりしを衣更へへ不義密通の罪により追われる身となつてしまった私たちだが、今はひっそりと隠れ住み、こうして衣更の夏を迎えられることがありがたいと、いう浄瑠璃の一場面のような句にへ俳句にもこんな可能性がひそんでゐたのかと心の底から深いため息が出た（「青玄」昭和二十八年七月号）と、驚きをもつて接し、へ蕪村の俳句が持つ物語性が私の志向を決定したとも語るほど、俳句で虚構の世界を描き出すことを志向していた。近代詩人の萩原朔太郎は、蕪村の句に郷愁という詩情を見出し、へ女俱して内裏拌まん朧月〜という作品に対しては、へ「春宵怨」とも言うべき、

こうしたエロチカル・センチメントを歌う（『郷愁の詩人と謝蕪村』昭和十一年）と、濃密な抒情を発見しているが、若き日の草城もまた、蕪村の句が持つ抒情性に惹かれたのだろう。第一句集『花氷』の中にも、へおぼろ夜や浮名たちたる刺青師へ落籍されしのちのぼんたが夜長かなといつた、江戸俳諧の素材にもなりそうなことを情感たっぷりに詠んでいる

さて、草城自身の女性との関わり方はどうであつたかというところ、菓子をつまむ際もまず手指を消毒し、スプーンを使ってすくうという徹底した潔癖症であり、殊に病原菌には強い恐怖心を抱いていたことから、花柳界に流行る病への警戒心は人一倍で、そのような場所には近づくとしなかつたという。一方で、カフェの店員だつた女性に淡い恋心を抱きながらも同級生の男に先を越されたり、京都帝国大学の学生であつた際にはある女性と相思相愛となりながらも彼女に重い持病があつたことから結婚には踏み切れず、ついには彼女の主治医との三角関係とな

つてそちらに嫁がれてしまっている。草城は、それらの恋の記憶を「京鹿子」や「馬酔木」「ホトトギス」などの俳誌に小説として発表している。草城の評伝を本格的にまとめた伊丹啓子によれば、登場人物の名前こそ変えてはいるものの、小説に書かれている内容は、周辺の人々の書き残したものと照合するに、かなりの部分が事実に基づいているという。もちろん多少なりとも脚色はあったはずだが、総じて草城の小説は実体験がないと書けないものであったようだ。対して俳句は瞬間や場面を切り取る性質のものであり、一句だけでは細かい人物設定や情景の説明ができない。ただし、連作をもつてすれば、時間の流れに沿う場面の展開やストーリー性を、作者の意図をある程度確保しながら読者に提示することが可能である。ここに草城が第一句集『花氷』の頃より志向していたフィクションによる物語世界を俳句で描き出すことが可能になった。

折しも秋櫻子、誓子による連作俳句の勃興期

である昭和九年、俳句総合雑誌「俳句研究」より作品依頼を受けた草城は、新婚初夜の情感を連作によって作品化することを思いつく。実のところ、草城は昭和六年二月に結婚をしているが、新婚旅行には行っていない。かくして「ミヤコ・ホテル」連作十句は「俳句研究」創刊第二号（昭和九年四月号）に掲載された。

ミヤコ・ホテル

けふよりの妻と来て泊つる宵の春
夜半の春なほ処女なる妻と居りぬ
枕辺の春の灯は妻が消しぬ
をみなとはかゝるものかも春の闇
薔薇にほふはじめての夜のしらみつゝ
妻の額に春の曙はやかき
麗らかな朝の焼麴はづかしく
湯あがりの素顔したしく春の昼
永き日や相触れし手はふれしまゝ
失ひしものを憶へり花曇

当時タブー視されていた性を詠んだことは毀誉褒貶の的となる。まず賞賛を寄せたのは富安風生・東京三・西東三鬼・水谷碎壺ら。俳壇の外からも、室生犀星が（性を正面から取り上げた新鮮な表現によって）俳句精神が老年者の遊び文学でなかったことを意味する（「俳句研究」昭和十年二月）と賛辞を惜しまなかった。一方で、久保田万太郎や水原秋櫻子は、「ミヤコ・ホテル」は連作としてへ一句一句決して独立し存在をもつてゐない。（「俳句研究」昭和九年五月号）と批判し、才氣が上滑りしたへ草城氏の欠点を暴露した悪作である（「馬酔木」昭和九年六月号）と断じる。草城と同年齢であつた中村草田男はもつとも強く批判し、それに対して草城も反論を重ねて論争となる。興味深いことに、最初性は俳句の素材に選んだことへの糾弾が、やがて句材はどこに求め、いかなる態度で詠むべきかに論点が移り、最後には草城から無季容認とも思える弁が飛び出す。草田男にとって俳句とは、作者の心境を自然の事象の中に投影し、

自己との交情を目指すへ本質的意味に於て自然
諷詠詩へ「新潮」昭和十一年七月号」と考えて
いた。そして、新興俳人たちは新奇を追うこと
に終始したばかりに自然の中にあるいのちを軽
視し、へ自己の真実なる心境から離れてしまっ
た」と述べる。それに対して草城は、へ季節の
支配を受ける人生の諸事象のみならず、季節の
支配を受けない人生、支配を受けてもその支配
と詩因とは関係のない人生の諸事象も亦僕たち
の俳句の詩因であり得る（「新潮」昭和十一年八
月号）と述べている。草田男が主張するような、
自然美を通じて自己の心情・人生・命の在り方
までを全力で詠みあげることが志す俳句観と、
それまでの花鳥諷詠的な俳句では取り扱ってこ
なかつたジャンルからも積極的に句材を求め、
それらを表現するためであれば無季も容認する
草城の俳句観は平行線のままで終わった。この
論争を通じて、草城は俳句でフィクションの世
界を作りあげる際に、有季の縛りからは自由で
あろうとしたことが窺える。「ミヤコ・ホテル」

は有季定型の連作ではあったが、この頃より無季容認という立場を取り始めた草城にとって、自己の作品が俳句である要件として相対的に定型の重要度が増していったことは想像に難くない。

もう一つ、草城のフイクションの句を見てみよう。「婦人公論」昭和十二年四月号に掲載された「マダムコルト」である。ここでは無季の句も含む連作になっている。

春の夜の自動拳銃夫人の手に狎るゝ
白き掌にコルト凛々として黒し
夫人嬋娟として七人の敵を持つ
愛しコルト秘む必殺の弾丸を八つ
コルト睡ぬロリガンにほふ乳房の蔭

後に草城は、この「マダムコルト」から短編小説を紡ぎだしている。「縷紅莊——大人のためのメルヘン」と名付けられこの小説は、昭和二十三年の「現代俳句」四月号にて発表された。主

人公の画家が、別荘「縷紅莊」の持ち主である
既婚女性と一度だけ関係を持つ場面で、画家の
目の前に置かれたのが、女性の持ち物である小
型の拳銃である。評論家の神田秀夫からの酷評
をはじめ、あまり話題にはならなかった短編小
説ではあるが、草城の連作俳句はしばしばフイ
クシヨンの世界を設定し、その筋書きに沿っ
て場面転換をしていたことが窺える
「ミヤコ・ホテル」にしても、発表当時は性
を俳句に詠んでしまったことに対して賛否両論
であつたが、これはフイクシヨンであつたこと
を考えると、草城が詠みたかつたのは大正末期
から昭和初期に新たに出現した都会の若い生活
者の世界、モダニズムに取材した架空の人物の
人生の一場面だつたのではないだろうか。だか
らこそ、題名に新婚旅行先として人々が憧れた
最先端の一流ホテルの名前を選んだのだろう。
そもそも結婚生活の始まりを甘く耽美的に描こ
うという態度は、結婚が双方の家の経済的・人
的資源の保持と継承という機能だけでなく、当人

同士の恋愛という感情的な面も期待される近代的な結婚観がなければ成立しない。

若き日の実体験をもとにした小説という散文を書く経験を持っていた一方で、俳句には散文では表しきれないフィクション性、物語性を求めた時、草城は俳句が散文や短歌とは異なる独自性は、季感の有無が問われなくなったことで、相対的に重要度が増す定型感にあると結論付け、例え他の作家の手による体験記に取材したとしても、そこに俳句の定型感をもつて新たな世界を作り出すのであれば、作家としての技術が要求されると考えたのだった。

五、戦争と美

山城むつみは『文学のプログラム』の中で、一九九〇年代の湾岸戦争の攻撃を伝えるテレビのニュース映像が夜空に無数の閃光広がる美しいスペクトルとして記憶されてしまうことと、一九四一年の真珠湾攻撃を伝える新聞写真に接して、小林秀雄が抱いた美的印象に共通性

を見出す。同時に、空襲に遭った後の東京の風景を記した坂口安吾の文章をへ戦争の美と崇高を確認する証言として取り上げる。焼夷弾の雨が降り、編隊が頭上を通過していった後の、おびただしい死体や路上の鮮血にすらへ捨てられた紙屑を見るほどの関心しか示さない。罹災者たちの蜿蜒たる流れは、へ虚脱や放心と種類の違った驚くべき充滿と重力を持つ無心であり、素直な運命の子供であつた。坂口安吾『墮落論』昭和二十一年。と安吾は記す。山城むつみはさらに安吾が記したへ戦争中の日本は嘘のような理想郷で、ただ虚しい美しさに咲きあふれていた。それは人間の真実の美しさではない。そして我々が考えることを忘れるなら、これほど気楽なそして壮観な見世物はないだろう。たとえば爆弾の絶えざる恐怖があるにしても、考えることがない限り人は常に気楽であり、ただ惚れ惚れと見とれておれば良かったのだ。私は一人の馬鹿であつた。最も無邪気に戦争と遊び戯れていた。という文を引きながら

へ一人の馬鹿として、戦争の美しさに惚れ惚れとみとれ、最も無邪気に戦争と遊び戯れながら、（略）ただ虚しい美しさ、嘘のような理想郷と彼は書いていた。安吾はうつとりみとれながらも、その美しさ、その理想郷に空虚や虚偽を見出すことを忘れていない。それは人間の真実の美しさではない、と。この場合、空虚とは「人間」がないということである。圧倒的に美しく、懐かしいが、しかし「人間」がそこにはないがゆえに、それはただ虚しいのである。また、虚偽とは「考える」という質が欠けているということである。爆撃下の光景は「考える」ことを忘れさせてくれるかぎりにおいて圧倒的に美しく崇高であるにすぎない。たとえ爆弾の絶えざる恐怖に戦っている、戦争ほど気楽なそして壮観なスペクタクルはないといえるのは、それを考えないでいるかぎりにおいてのことなのである。（山城むつみ『文学のプログラム』平成七年）

と、死と隣り合わせになっている戦争でも人々

が幻惑されてしまう美が隠されていると指摘する。そこで思い出されるのが、草城が中心となつて学生時に発行していた俳誌「京鹿子」に寄せた「趣味としてのミリタリズム」という随筆である。一人のメイルマンを主人公とするアメリカ映画への感想の中に次のように書かれている。

へ私はこの艦隊の活動がこの上もなく愉快なのである。趣味としてミリタリズムを讃美するのである。ミリタリズムをミリタリズムとして享樂したのである。帝国主義の手段としてのミリタリズムは私は好まない。ミリタリズムは何らかの他のイムズの手段となることによつて墮落する。自己目的のそれは換言すれば無目的の――ミリタリズムは、少し突飛な所説かもしれないが芸術上の一つのイムズであり得る。(中略)ミリタリズムの芸術美の本質は力である。雄渾である。(「京鹿子」

大正十三年九月号)

草城の指す「技術」によつて咀嚼されれば、殺

戮のための武器も戦争も、美のモチーフの一つになつてしまふ危険性を孕んでいる。伝統俳句派の中村汀女でさえも、空襲で次々と火の手が上がる中、上空を飛び交う爆撃機を恐ろしさというよりへ火事明かりまた輝きて一機過ぐゝと、半ば恍惚とした態度で詠んでいるのは、ひとたび戦火が起これば、そこに出現する景物を冷徹にただ無心に見つめてしまふ俳人たちの宿命なのだろうか。

六、「俳句の技術」と戦争

戦争を俳句の題材として扱うことを考える時、草城は「俳句の技術」というものを信頼しすぎていたのではなからうか。なるほど、「ミヤコ・ホテル」のような個人の生活圏の中での出来事で実際にあつたのか無かつたのか判然としない場合や、「マダム・コルト」のように架空の人物を詠んだ景であれば、虚構の世界も定型に切り出されることで一つの詩情を作り出すことが出来たであろう。だが、当時の中国大陆での前線

では実際に血なまぐさい戦闘が繰り広げられ、出征者は負傷のみならず病や飢えといった命の危険を常に感じながら従軍していた。それらの人々にとっては戦地の体験は強烈な現実の記憶であり、同時に銃後の彼らの親や兄弟、妻たちにとっても家族の生死がかかった現実そのものであった。そのような性質の戦争を詠むのには、俳句の技術だけでは読者の心を捉えるのに限界があったのだろう。実際、草城がリーダー的役割を務めていた俳誌「旗艦」の中からも、同人の片山桃史が、草城のへ特務兵かるがると子抱きし夢〜という句に対し、自己の出征の体験に照らしてへ私の経験や私の隊の者達はみな肉親の夢を余り見ぬことに就いていつも語り合つたものである。(略)草城先生のこの俳句は勿論私たちの経験とは別に存在すべき筈のものではあるが私にはびつたり響いて来ない(「旗艦」昭和十五年十一月号)〜と、率直な見解を述べている。

同時に、草城がかつてへ前線に参加することを得ないわれわれは、せめてその技術を以て優れ

たる戦争俳句の成立に協力する責務がある（「旗艦」昭和十三年十月号）と、述べたように、当時の国家体制に奉仕するという意識があつたことも見逃せない。銃後にあつて前線の兵たちの勇姿を想い、国民への戦意発揚と戦争協力を促したのが草城の「戦火想望」俳句であつた。季感のない戦争に対して、無季容認という立場で新興俳句の俳人たちは果敢に戦争俳句を詠んでいく。その中には、

軍靴行進露帝のごとき痴呆らよ　平畑静塔
銃後といふ不思議な町を丘で見た　渡辺白泉

などの反戦思想的な句も含まれていた。このころが後に無季俳句は伝統的な社会秩序を脅かすと特高から目され、昭和十五年二月と五月の二度に渡る「京大俳句」関係者十五名の一斉検挙につながる。そして草城自身もまた、弾圧を恐れて俳壇からの引退を余儀なくされてしまうのは皮肉なことであつた。

【主な参考文献】

- 伊丹啓子『日野草城伝』（沖積社、平成十二年）
- 復本一郎『日野草城 俳句を変えた男』（角川学芸出版平成十七年）
- 室生幸太郎編『日野草城全句集』（沖積社、昭和六十三年）
- 樽見博『戦争俳句と俳人たち』（トランスビュー、平成二十六年）
- 川名大『戦争と俳句』『富沢赤黄男戦中俳句日記・「支那事変六千句」を読み解く』（創風社、令和二年）
- 楠本憲吉『一筋の道は盡きず 昭和俳壇史』（近藤書店、昭和三十二年）
- 萩原朔太郎『郷愁の詩人 与謝蕪村』（第一書房、昭和十一年）
- 山城むつみ『文学のプログラム』（太田出版、平成七年）

¹ 同時に掲載された東京三も同様に原作の五

月五日から五月十六日の毎日の記録に沿って戦況の前書きを付し、

決死隊となりしが生きて米を研ぐ

捕虜にして巨漢なり戀の文を抱く

傷兵を抱き傷兵の血の染まる

と、いつた作品を合計五十句発表。ただ渡辺白泉のみが

難民の老婆なり更に男なり

日の丸を背に手榴弾掴みて去る

戦場へ手ゆき足ゆき胴ゆけり

と、難民や兵士たちの様子を重苦しく詠むこと。底に反戦的な思想を忍ばせた態度で詠んでい